

薬学部・薬科大学 訪問

Report 14

福岡大学薬学部 生化学・病態生化学教室

話し手：添田 泰司 教授

Shinji Soeda

福岡市西南部に広大な^{ななくま}七隈キャンパスを擁する福岡大学は、約80年の歴史を誇る総合大学です。薬学部は1960年に増設され今年で創立53年となり、これまでに約9,000人の卒業生を輩出してきました。今回は、福岡大学一筋の添田泰司先生に生化学の魅力、薬学部および福岡大学の取り組みについて伺いました。



添田泰司教授



福岡大学創立75周年の2009年に完成した薬学部17号館

整備された薬学部の新棟

七隈キャンパスには病院を含む多くの建物があり、9学部31学科と大学院10研究科34専攻の2万人を超す学生が学んでいます。薬学部では薬学教育6年制の開始に合わせ、2005年に薬学部専用の16号館、さらに2009年に17号館が烏帽子池を見下ろす場所に完成しました。基礎分野の実習をはじめ、服薬指導や輸液調剤などの実務実習の設備も充実し、薬学生たちはチーム医療で活躍する薬剤師や研究者、技術者などを目指しています。

同じキャンパス内に医学部(医学科、看護学科)と大学病院、スポーツ科学部があり、今まで以上に医療系3学部間で連携しようと新しい取り組みも始まっています。

生化学は病態や薬理の解明に必須の学問

生化学教室は、薬学部増設時に誕生した最も古くからある教室の一つです。当時開設されていた薬学部・薬科大学では、生化学の研究はそれほど行われていませんでした。私は学生時代に聴講した、山村雄一先生(当時、大阪大学医学部教授)による出張学部講義に感銘を受け、この道に進みました。現在、生化学教室は教員6名に学生76名という大所帯で、それぞれが脳の老化や生活習慣病、白血病と多面的な研究に取り組んでいます。

私が研究を通して体感したことは、『想像は創造を生む』です。自分の研究と異なる分野の優れた論文を読むことで新しい着想を得て、成果へつなげることです。こうした思考を持てるようになって、一人前の研究者です。学生たちにも探求し、問題を発見し、解決するという研究能力を持つ薬剤師に育ってほしいと願っています。

生化学をはじめ基礎的なライフサイエンスは、国家試験での出題数は少ないですが、病態や薬理を解明するために必須の学問です。卒後教育として行っている「覚えてますか〇〇学」という講演シリーズは評判があり、なかでも生化学や薬理学は人気があります。医療現場にいる卒業生のほうが、生化学の重要性を実感しているものと思います。

社会経験も成長の糧に

さまざまな経験やたくさんの失敗があつてこそ、医療で必要な人と人との関係づくりが身につきます。私が若いときに学生たちと飲み歩いたりしたことも、振り返れば全人教育に少し貢献できたのでは、と思ったりもします。

社会との関わりがまだ少ない学生にとって、実務実習は貴重な経験です。実習前には大学でもできる限りの教育を行っていますが、知識や技能はもとより態度も学生をご指導いただき、世間に通用する薬剤師の育成にご協力をお願いいたします。そして母校(研究室)は卒業生にとって「社会人としての実家」ですから、いつでも戻ってきていただきたいと思います。

学校メモ

- ◇昭和9(1934)年 福岡高等商業学校を設立
- ◇昭和24(1949)年 福岡商科大学を設立
- ◇昭和31(1956)年 福岡大学に改称
- ◇昭和35(1960)年 薬学部(薬学科)を増設
- ◇平成18(2006)年 薬学部医療薬学科および生命薬学科を改組して薬学科(6年制)を増設
- ◇1学年の定員230名。現在の在校生は薬学科1,439名、大学院修士課程5名、博士課程6名(内2012年4月の入学人数は学部232名、大学院7名)